

## FD 学外セミナー参加報告書

氏名： 岳 五一

所属/職名： 知能情報学部/教授

参加セミナー名： 私情協「教育改革 ICT 戦略大会」

セミナー参加日時/場所： 平成 28 年 9 月 6 日（火）・7 日（水）/アルカディア市ヶ谷（東京、私学会館）

### ■セミナー内容・所感・授業や本学への活用について

私立大学情報教育協会による「教育改革 ICT 戦略大会」は、平成 28 年 9 月 6 日（火）・7 日（水）・8 日（木）において開催されました。文部科学省が後援する本大会のテーマは「教育の質的転換に向けた内部質保証を考える」でした。

開催趣旨は <http://www.juce.jp/LINK/taikai/taikai2016.htm> に記載されている通り、「各大学は、国の大学改革実行プランに沿って教育の質的転換に向けて、改革努力を続けている。例えば、三つのポリシーによる教育方針の明確化、カリキュラムマップ・シラバス改善などの教育課題の体系化、成績評価の厳格化、アクティブ・ラーニングの組織的教育の実施、ポートフォリオ・IR 等による学修成果の可視化など、全学的な教学マネジメントの確立に着手したところである。しかし、これらの取り組みは制度・仕組みの整備であって、必ずしも教員個人及び教員間による教育内容の調整・改善に取り組む質的転換につながっていない。」でした。

初日の 9 月 6 日は 5 つの講演による全体会でした。独立行政法人日本学術振興会理事長の安西祐一郎氏による【教育の質的転換に向けた内部質保証の一体改革】との講演の中で、安西理事長は三つのポリシー（入学選抜・カリキュラム・学位授与）省令化による内部質保証の課題を中心に講演しました。「三つのポリシーはほとんどの大学で定められているが、実際の教育活動との整合性・関係性が意識されていないことなども指摘されている。問題は、大学が掲げる育成すべき力を確実に身につけさせるには、入学者受け入れ方針を入口として、人材養成目的である出口としての学位授与方針と学位プログラム中心のカリキュラム編成の整合性など、教員個人と教員組織による教育内容への P D C A による内部質保証の仕組みと理解が喫緊の課題となっている。」と指摘しています。

次に共愛学園前橋国際大学副学長の後藤 さゆり氏による【質保証を目指した試み】との講演でした。中で、「学修成果の可視化と改善への取り組み」を中心に講演しました。「教育の国際標準化に向けた学修質保証システムを構築するために、アクティブ・ラーニングを中心とした学修成果の可視化を地域の産業界と協働して成果指標を開発し、ポートフォリオ、ステークホルダー調査、IR などを用いて多面的に教育改善に取り組んでいる」事例を含めて紹介されました。

続いて、午後部では、名古屋商科大学経営学部教授の亀倉 正彦氏による【アクティブ・ラーニングの効果を高めるノウハウ】の講演の中で、「アクティブ・ラーニングが様々な分野で広がり、深化・発展していくときに、これまで体験した失敗の原因と結果について振り返り、多くの関係者に授業設計するための留意点及び対策について「アクティブ・ラーニング失敗事例ハンドブック」として知識化を試みた。」と、アクティブ・ラーニングを振り返り、その課題について述べました。

さらに、信州大学キャリア教育・サポートセンター副センター長の林 靖人氏は【アクティブ・ラーニングを導入した地域連携教育】について、「学問と社会のつながりを理解し、考え、行動できる「課題解決人材」の育成の一貫として、「地域」「社会」の現実的な課題をケーススタディとして取り上げ、ワークショップや学生主体による実践的な課題解決のアクティブ・ラーニング手法の開発推進に取り組んでいる」との地域と連携・地域を活用したPBL教育の導入と効果を紹介しました。

最後に私情協学系別FD/ICT活用研究委員会委員でもある昭和大学歯学部教授片岡 竜太氏による【知識の創造を目指したアクティブ・ラーニングの考察】という講演がありました。そこで、ネット会議による分野横断型PBL教育の提案を中心に「健康社会の実現に貢献できる医療人を育成するため、多職種の視点を多面的に組み合わせる中で、最適な解決方法を考えるクリティカル・シンキングを中心としたPBL学修が必要となり、多方面の有識者からの知見を教材にしてネット上などで知識の創造を目指した学びのモデルを考察した」との内容でした。

次の日の9月7日(水)は同時進行の二つの分科会によりテーマ別意見交流が行われました。それぞれの分科会のテーマと主要内容は下記の通りです。

**【分科会：A】 ICTを活用したアクティブ・ラーニングの取り組みと課題**

アクティブ・ラーニングを効果的に進めるために、ICTを活用した分野別の取り組みを通じて、授業方略、学修成果の評価、学修支援の仕組みなどについて留意すべき事項及び課題について認識を共有する。

**【分科会：B】 教育を客観的に振り返るための情報環境整備～IR導入の取り組みと課題**

教育活動の実態を客観的・体系的に把握し、大学が抱える問題を科学的に分析し、その解決策を提言する仕組みとしてのIR導入の実態とその効果・検証について認識を共有する。

【分科会：C】 アクティブ・ラーニングの評価方法

主体性、多様性、協働性などのコンピテンシーの評価は、客観的に点数評価ができない難しさがあることから、アウトカムの設定を工夫する必要がある。現在、取り入れられている評価手法について、その効果と改善に向けた課題について認識を共有する。

【分科会：D】 価値の創出を目指した問題発見・解決思考の情報リテラシー教育モデル

これからの時代に求められる能力として、自ら問題を発見し、課題解決に向けて主体的に解を見出す能力が求められている。その学修基盤として質の高い情報を取捨選択し、情報を用いて課題探求及び新たな価値の創出のために使いこなす情報活用能力を育成する初年次教育と専門教育を連携した教育モデルを提案する。

いずれも話題提供者による事例の紹介や課題提供がありました。その後、講演者と参加者の間で活発な質疑応答がなされました。これらの意見交換などによって教育活動の実態を客観的・体系的に把握し、大学が抱える問題を科学的に分析し、その解決策を提言するなど、認識を共有しました。

一方、大学・短期大学と本協会の賛助会員企業との連携による ICT 導入・活用事例（ポスターセッション）も同時に行われました。アクティブ・ラーニング、LMS システム、ラーニングコモンズ、ポートフォリオシステム、IR システム、教学マネジメントシステムなど、ICT 導入・活用の事例紹介をポスターセッション形式で行われました。

甲南大学は、“Student First”宣言に基づき、学生の資質向上を第一に考えた取り組みをしており、社会に有為な人材を育成してきた伝統を活かしながら、教学新機軸構想を中心とする「教育力の甲南」の実現を目指しています。そこで、プレミアプロジェクトを中心とする大学および学部の新しい取り組みとするアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの実現が大いに期待されます。

今回のような「教育の質的転換に向けた内部質保証を考える」機会において大学間そして、教職員間で新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向け、社会及び世界から信頼される人材育成の内部質保証のあり方について、三つのポリシーの一貫性、整合性の面から探求することが大変重要と考えられます。甲南大学の「建学の精神」、「教学の理念」、そして「甲南大学の3つのポリシー」をふまえ、各学部・研究科で定めている3つのポリシーである教育目的を達成するための制度設計の指針をもとに教育内容の調整・改善に取り組む質的転換につながるよう、一層の努力が期待されます。そのため、本大会で共有した取り組みや課題、目標などを生かして、甲南大学の教育活動の実態を客観的・体系的に把握せねばなりません、そしてその解決策を提言する仕組みとしての教育の質的転換に向けた内部質保証の実態とその効果・検証について認識を共有できればと思います。